

興ざめのするもの、昼間に吠える犬。春の網代。三、四月の（頃に着ている）紅梅襲の衣。（自分の）牛が死んでしまった牛飼。赤ん坊が死んでしまった産室。火をおこさない角火鉢や、いろり。博士が次々と女の子を産ませているの。方違えに行ったのに、もてなしをしないところ。まして節分（の方違えにもてなしの用意がない家）などは、（するのが当然なので）非常に興ざめだ。地方から送った手紙で贈り物がないもの（は興ざめだ）。京からの手紙であつても（贈り物がないと）そう（興ざめだ）思っているだろうが、それは知りたくないことなどをも書き集めて、都で起こった出来事などを、聞くので、（贈り物などがなくても）とてもよい。人のところに格別きれいに書いて送った手紙の返事を、もう持ってきているだろうなあ、（それにしても）変に遅いなあと、待つうちに、先ほどの手紙を、立て文でも、結び文でもたいへん汚らしく取り扱って、ぶくぶくに紙をけばださせて、上に引いてあつた封じ墨なども消えて、「（先方は）いらっしやいませでした。」もしくは、「物忌みだとおっしゃって受け取りません。」と言つて持つて帰つて来たのは、とても情けなく、興ざめである。

修験者が物の怪を調伏するといつて、たいそう得意顔で、独鈷や数珠などを（よりましたに）持たせて、蟬のような声をしぼり出して座つて読経しているが、まったくそんな（調伏する）様子もなく、護法童子もつかないので、（家族は）集まり座つて祈念をしているが、男の人も女の人も、変だなと思つていると、決まつた時間が過ぎるまで、（経文を）読みくたびれて、「まったく（物の怪がよりましたに）つかない。立ちなさい。」と言つて、（よりましたから）数珠を取り返して、「ああ、まったく効き目がないなあ。」と（家の人たちの気も知らないで）言つて、額から上の方へ（頭を）なで上げ、あくびを自分から（一番最初に何気なく）して、（何かに）寄りかかつて横になつてしまつたの（は興ざめである）。たいそう眠たいと思つているときに、たいして親しくもない人が揺り起こして、無理に話しかけるのは、とても興ざめである。

除目の時に官職を得ることができない人の家（は興ざめだ）。今年はず（任官されるだろう）、と聞いて、（この家に）以前から仕えていた者たちで、離れ離れになつていた者たちや、（京から離れた）田舎めいている所に住んでいる者たちなどが、みんな

集まってきて、出入りする牛車の轆も、隙間なく見え、（任官祈願をするために）寺社詣でをする供として、我も我もと参詣してお仕え申し上げ、物を食べ、酒を飲み、大声で騒ぎ合っているのに、（除目の）終わる明け方まで（任官を知らせるために）門をたたく音もしない。変だななどと耳をすまして聞くと、先払いの声などがして、上達部などは（内裏から）すっかりご退出になった。様子を探る者として夜から（出かけて）寒がつて震えていた下男が、とても憂鬱そうに歩いて来るのを見る者たちは、（除目の結果を）尋ねることさえもまったくできない。よそから来た（事情が飲み込めていない）者などが、「ご主人は何におなりになったのか。」などと聞くと、答えには、「どこそこの前の国司に（おなりになった）。」などと決まって答える。心から期待していた者は、実に残念だと思っている。早朝になって、隙間がないほどにいた者たちが、一人、二人とそつと抜け出して去る。古くから仕えている者で、そう（簡単に）離れていけそうにない者は、来年の（国司が交替する可能性のある）国々を、指を折って数え上げたりして、（家の中を）空元氣を出してうろついているのも、たいそう滑稽だ。興ざめである。